



めくってみると……



床下にグラスウール断熱材が納まっている。一見すると、不具合は見当たらない

**事例②
施工不良
発見!**

断熱材をめくると、床板が濡れ、カビが生えていた

カビの被害レベル



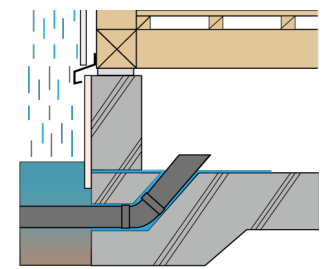
その他の事例



建築中の剛床にカビが生えている。原因は床下に貯まった雨水である



左写真の床下。雨水が貯まっている



外周の土を耐圧盤天端よりあげてしまうと、サイホン現象により、床下に雨水が流入することがあるので注意



引渡し前に発見した基礎断熱の床板のカビ。建築中、床下に貯まった雨水を放置したことが原因と考えられる

**早期処置
が肝心!**



基礎断熱で先行床の場合は、床が閉じられたままなので、床下に貯まった雨水に気づかない、くみ出せない、乾燥しにくい。気づいたときには床板がカビだらけなんてことになりかねない。床板は仮留めにし、上棟後に床板を開けて床下の乾燥を促したい

床下にカビを発生させない予防策

「引渡し前なのに床下にカビが生えた。なんとかならないか」。暖かくなるとこんな問い合わせが週に1〜2件ある。床下調査後に発見した共通点は、①換気不足の基礎断熱、②先行床（床勝ち）、③雨に濡れたの3つだ。

空気中に漂っているカビの胞子は、有機物（木材・水分・温度・酸素がそろって発芽する。つまり、木は濡れるとカビののだ。カビさせないためには、建築中の雨養生を徹底し、床に貯まった雨水は乾燥させ、床下の換気を十分行う必要がある。床断熱の場合は、床面で断熱・気密をしつかり取ることが肝要だ。

また、基礎断熱で先行床の場合、床板は仮留めにし、上棟後は早めに開け、貯まった雨水をくみ出し、乾燥を促すなどの対策をしてほしい。

浅葉 健介 (日本ボレイト)
「床下は家の調子のバロメーター」を合言葉に、シロアリの被害が疑われる家の床下に潜り続け、その総数は数千件以上。間の中を音もなく忍び寄り、骨をむしばみ、転移し、その害が満身に及ぶこともある「家の癌」、シロアリ。そんな敵から家を守る専門医として、今日も床下での診察が続く

**床下は語る! 第②回
間違いだらけの
施工現場**



**事例①
施工不良
発見!**

はがき2枚分の床面の換気口があるのみ

築5年で大引などにびっしりカビが生えた。1階床面積20坪弱で、はがき2枚分の換気口が1つあるだけ。明らかな換気量不足が一因と考えられる

カビの被害レベル



**潜入調査
②**

**引渡し直後なのにカビまみれ
床下結露が発生する3大要因**

暖かくなり空気が湿つてくると目につく真菌、カビ。人は、カビを上手に利用してきた。世界初の抗生物質「ペニシリン」は青カビ（ペニシリウム）由来だし、カマンベールチーズは白カビ（ペニシリウム・カマンベレイ）である。しかし、カビの種類によっては健康に悪影響を及ぼす。カビと聞くと浴室となれば、腐朽菌の比ではない。早速、カビ被害の事例とその原因を見ていこう。

事例① 床下の換気量が少ない家
北関東に建つ築5年の基礎内断熱の家。140頁写真は、床下の大引である。インサイジング加工（※1）があるので木材保存処理がされているようだが、カビがびっしり生えている。一方、同地域で建てられた同じ築5年の床断熱の家では、カビは見られなかった。この違いは、床下の換気量である。カビが発生した家は、1階床面積が20坪弱なのだが、はがき2枚分ほどの大きさの換気口が床面に1つあるだけで、明らかに換気量が不足していた。築2年ほどは基礎コンクリートから養生水分が蒸発するため、その水蒸気を逃がす十分な換気が必要なのである。今回は、次亜塩素酸水で大引き表面のカビを除去し、防カビ添加剤を配合したホウ酸を散布して予防した。また、床の換気口の増設の検討も促した。

※1 木材保存剤を染み込ませるために木材表面に穴をかける加工

事例② 低断熱低気密の家
南関東に建つ築8カ月の床断熱の家。床にグラスウールが納まっている141頁上部の写真を見ると、何も問題なく見えるが、床の断熱材をめくると床板に結露が生じ、カビが発生していた。これは最近多い事例だ。

原因は、剛床の配管用の孔を気密処理していなかったためである（141頁上部写真左）。住まい手はテレワークをしており、日中ずっと冷房をかけていた。冷房の冷たい空気は床を冷やす。一方、床下には、暖かく湿った空気が流れ込む。暖かく湿った床下の空気が、配管用の孔の隙間に流れ込み、冷たい床に触れて結露が起り、カビが増殖したのだ。剛床の孔を1液型簡易発泡ウレタンフォームで埋める処置を施した。このような孔の気密処理を怠ってはいけない。